

[研究論文]

## 美術科に対する自己効力感尺度作成

谷田良子<sup>1</sup>・前田基成<sup>2</sup>

1 情報学部情報メディア学科

2 女子美術大学大学院美術研究科

## Development of a Self-efficacy Scale in Art

Ryoko TANIDA<sup>1</sup>, Motonari MAEDA<sup>2</sup>

## Abstract

The purpose of this study was to develop a scale designed to measure students' Self-Efficacy Scale in Art (SESA), and to examine the reliability and validity of that scale. In Surveys I and II, we conducted a questionnaire survey (including a scale of General Self-Efficacy Scale) targeting 520 students in two junior high schools and two senior high schools. Based on the results of the above, we conducted a factor analysis of 20 Self-efficacy measurement items using the factor analysis, which enabled us to derive the following four factors: "Creative ability", "Effort-oriented", "Understanding of the theme" and "Interest". We then developed a Self-Efficacy Scale in Art comprised total of 17 items. The results showed actual state of students' self-efficacy recognition toward art. The averages were significantly high in each factor loadings. And a positive correlation was observed between Surveys I and II about SESA. Positive correlation was observed with between SESA and General Self-Efficacy Scale. Additionally examinations of reliability by split-half method showed very high confidence coefficient. There was also a positive correlation in the concurrent validity study. Reliability was also obtained between SESA and school grades, and in the results of study with technical and non-technical students too.

Keywords: art education, self-efficacy, scale development

## 1. はじめに

わが国の美術教育の現場において、学年が進行するとともに図画工作・美術が好きではないという児童・生徒が増加することがいわれている。例えば、国立教育政策研究所教育過程研究センターが、平成21年から22年にかけて、全国の国公立私立学校から無作為抽出された約7,000人の小・中学生を対象とした「特定の課題に関する調査(図画工作・美術)」<sup>1)</sup>が明らかにしたところでは、図画工作が好きだと答えた小学生は全体の48.3%であり、中学生になると35.2%に減少している。つまり、学年が進むと図画工作・美術の学習が好きな児童・生徒は減少するということである。ただ、同じ調査で中学3年生に「自分が思うように絵が描けるようになりたいですか」という質問をすると、73.2%の生徒が「そう思う」と答えている。また、「美術の授業で、スケッチを描くことは好きですか」という質問に「好きだ」と答えた生徒は29.6%にとどまったが、「美術の授業でどんな

ことを学びたいですか」という質問には52.4%の生徒が「描いたり、作ったりする技術」と答えている。美術が好きな生徒は小学生から中学生になると減少するが、絵を描けるようになりたいと思う生徒が実際には多いと言える。

このことは、ローウェンフェルド<sup>2)</sup>による子どもの絵の発達段階説(表1)に照らし合わせると、9歳から11歳頃は「写実主義の開始」段階、11歳から13歳頃の発達段階は「擬似写実主義」の段階であり、小学校高学年頃から写実的な絵を描きたいと思うようになることを示している。

つまり、学年が進むにつれて図画工作・美術が好きではない児童・生徒が増加するのは、上手に絵を描きたいのであるが、描けないから、好きになれないから嫌いという背景があることがうかがわれる。

表 1. ローウェンフェルドによる子どもの絵の発達段階説<sup>2)</sup>

段階	年齢	特性
なぐり描き段階	2 歳～4 歳	無統制な運動、縦の運動の協応円形の統制の変化
様式化前の段階	4 歳～7 歳	再現と再現された物との関係の発見
様式化の段階	7 歳～9 歳	反復による概念の発見が様式になる
写実的の開始	9 歳から 11 歳	幾何学的な線からの移行、変遷の時期
擬似写実的段階	11 歳～13 歳	発達した知能
		ただし無自覚写実的な制作
		空間の再現では三次元的表現への衝動がある
決定の時期	13 歳～17 歳	環境に対する批判的意識性

実際、降旗<sup>3)</sup>の調査によれば、小学生から高校生へと学年が進むにしたがって、児童・生徒の図画工作・美術科への苦手意識は上昇しており、図画工作・美術が好きになれないのは、思ったように描けないから、作れないからといった理由があることを明らかにしている。また、東山<sup>4)</sup>によれば、小学校中学年～高学年ころを境に、児童の絵は図式的な絵から写実的な表現へと変化する。知的発達が著しいこのころから、子どもたちは自分と他者の作品を批判したり、評価したり、鑑賞したりする力を身につけ、同時に自分の作品の未熟さに気づき、「自分は下手なんだ」、「上手く描きたい」などといった技術的な欲求や不満が表れる。東山は、このことが子どもたちの表現意欲や興味を失う原因の一つであると指摘している。

これらのことを大規模なサンプルで調査した前田・西口<sup>5)</sup>は、小学校高学年、中学校と学年が進むごとに児童・生徒の図画工作・美術に対してネガティブなイメージを持つ要因として「技能への自信のなさ」「教師の指導や評価に対する不信感」「鑑賞の授業の面白さの有無」の3つの要因があることを明らかにした。しかしながら、さらにロジスティック回帰分析によって高校生が選択教科である芸術科で美術を選択するかしないかに対する影響の重みづけを検討したところ、上記3つの要因のうち、「技術への自信のなさ」のみが高校での美術の選択・非選択に有意に影響を及ぼしていることが確認された。

以上のように、美術科の学習内容に関して「上手く描けない／作れない」という苦手意識を抱えている状態は自分にはできるという見通しが低い状態、つまり美術科に対する自己効力感が低い状態であると言い換えられる。

自己効力感とは Bandura<sup>6)7)</sup>の社会的学習理論の中で提唱された概念で、個人がある状況において必要な行動をどの程度遂行することができるかという見通しあるいは予期のことである。Bandura は、先の見通しである予期を結果予期 (outcome expectancy) と効力予期 (effective expectancy) の2つに分けて考えている。その行動をするとどのような結果になるかについての予

期が結果予期、その行動を自分がどの程度できるかという予期が効力予期で、この効力予期のことを自己効力感として概念化した。つまり、自己効力感とは個人がある行動を起こす前に感じる遂行可能感、実行しようとする事柄の実現可能性に関する認知、自分にはここまでのことができるのだという確信のことである。

この自己効力感には2つの水準がある。第1は特定の課題や状況に対する自己効力感であり、第2は特定の課題や状況に関わらず、日常的な行動に影響を及ぼす自己効力感であり、個人の特性のようなものである。第1の水準である、特定の課題や状況に対する自己効力感については、学業達成との関連を明らかにしようとする研究が数多く行われてきた。

その先駆的な研究として、Schunk は算数課題の学習場面において、自己効力感が高い児童・生徒は、そうでない児童・生徒に比べて学習に粘り強く努力し、難しい問題にも意欲的に挑戦するので、その結果として学習効果も高いことを示している<sup>8)9)10)11)</sup>。

わが国でも、小・中学生を対象とした、ベネッセ教育総合研究所の調べでは<sup>12)</sup>、小学生でも中学生でも成績上位者の子どもの方が学習に対する自己効力感を高く感じていることに加えて、平日の学習時間も自己効力感の高い子どもの方が低い子どもよりも長かった。さらに自己効力感が高いほど困難な課題に対して粘り強く取り組む傾向が示唆された。

また、小学校高学年の児童を対象とした芝山ら<sup>13)</sup>の研究では、学習意欲と自己効力感との間に非常に強い相関があること、とりわけ高いレベルを出そうとする「達成志向」と自己効力感との間に最も強い相関あること、また「知的好奇心」と自己効力感の間にも強い相関があることが見出された。自己効力感が高いほど、学習に対する興味や関心が高く、自発的・能動的に学習に取り組む姿勢がうかがわれる。

このほかにも、玄<sup>14)</sup>は学業不振の小学生を対象として、教科学習に対する自己効力感を高めると、課題に対して興味や意欲が向上し、それが学習成果を高めるから、まず自己効力感を高めることが重要であるという研究成果を報告している。また、塩見・駒井<sup>15)</sup>は中学生の

理科学習において、自己効力感は学習成果と正の相関関係があること、および自己効力感は理科の学習に対する不安を弱めることを明らかにしている。

さらに、中学生の国語学習を対象に検討した伊藤<sup>16)</sup>の研究によると、国語に対する自己効力感が高いほど、多くの学習方略を使用するから、それが国語の成績にポジティブな影響をもたらすということを明らかにしている。森<sup>17)</sup>の大学生の英語学習における研究でも同じであった。

このように自己効力感と学習意欲、学業達成との関係がこれまでに数多く明らかにされてきた。ただ、小学生・中学生の図画工作・美術に関して自己効力感と学習意欲や学業達成についての研究はほとんど見当たらない。しかし、学年が進むにつれて図画工作・美術が嫌いな児童・生徒が増加するという現状から考えると、他の教科と同じように、図画工作・美術における自己効力感の研究を行うことは、大変意義深いことであると考えられる。そこで、その第一歩として本研究では美術科に対する自己効力感尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討することを目的とする。

## 2. 研究 1

### 2.1. 目的

美術に対する自己効力感尺度 (Self-Efficacy Scale in Art, 以下 SESA) を作成する。

### 2.2. 方法

#### 対象

首都圏の公立中学校 2 校の 2 年、3 年の生徒 434 人を対象とした。

#### 調査内容および手続き

Pintrich & De Groot<sup>18)</sup> や伊藤ら<sup>19)</sup> など、学業達成に関する自己効力感尺度や有能感尺度を参考に 20 項目が準備された。

Pintrich & De Groot<sup>18)</sup> の尺度は、学習に対する動機づけに関する質問項目群と自己調整学習方略に関する質問項目群とで構成されている。学習動機づけに関する質問項目の中に自己効力感を測定する項目が設けられており、それらの項目を参考に、美術科の自己効力感を測定する質問項目を作成した。

また、伊藤ら<sup>19)</sup> の尺度は、生徒らの体育科の授業に対する見通しの程度を測定するものである。これらを参考に美術科の自己効力感を測定する質問項目を作成した。

各項目に対しては 5 件法 (「1=まったくそう思わない」「2=そう思わない」「3=どちらともいえない」「4=そう思う」「5=とてもそう思う」) で回答を求めた。可能得点範囲は 20~100 点である。実施にあたっては学級ごとに集団で美術科教員によって行われた。

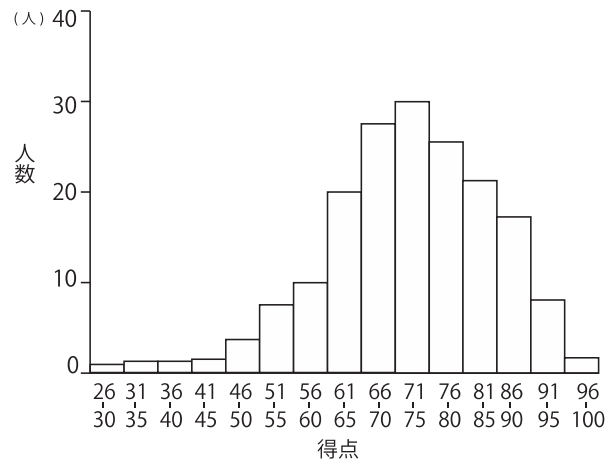


図 1. SESA 合計得点分布

### 2.3. 結果

対象となった 434 人のうち、天井効果とフロア効果が見られるなど極端な回答や、欠損値のある回答を除いた 415 人の回答が有効データとして分析の対象とされた。分析には SPSS Ver. 26 が用いられた。その結果、415 人の最高点は 95 点、最低点は 26 点、平均点 68.3 点、SD は 12.05 だった。

次に、有効回答を対象に因子分析を行った。まず、最尤法を用いた因子分析を行い、スクリー法によって因子数を 4 因子に決定した。次に、4 因子構造を仮定して再度、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。4 つの因子それぞれについて、因子負荷量が .40 以上の項目をその因子を特徴づける項目とした。また、複数の因子について、.40 以上の因子負荷量を持つ項目、どの因子に対しても、.40 以上の因子負荷量を持たない項目を削除した。最終的に残った 17 項目を美術に対する自己効力感尺度 (SESA) とした。図 1 に 17 項目について 415 人の合計得点の分布図を示す。正規分布をしているとみなしてよいと思われる。

表 2 は因子分析の結果を示している。第 1 因子を特徴づける項目は、「美術の授業で作る自分の作品は上手いと思う」「クラスメイトより上手に作ったり、描いたりできると思う」「クラスメイトに比べて、美術についてより多くのことを知っていると思う」などがあげられる。作品を作る能力があるという自信に強く関連すると考えられる項目が多かったことから、第 1 因子は「創造的能力」と命名された。

第 2 因子は「美術の作品づくりは、繰り返しやれば上手になると思う」「努力をしたら、不得意な作品づくりも、得意になれると思う」「がんばれば、美術の成績は良くなると思う」の 3 項目から構成されている。努力によって上手に作品を作ることができるようになるという信念に関連する項目であることから、第 2 因子は「努力志向」と命名された。

表 2. 因子分析の結果

項目内容		F1	F2	F3	F4
<b>F1 創造的能力 (<math>\alpha = .862</math>)</b>					
2	美術の授業で作る自分の作品は上手いと思う。	.875	-.021	-.202	.088
8	クラスメイトより上手に作ったり描いたりできると思う。	.852	.028	-.106	-.018
15	クラスメイトに比べて、美術についてより多くのことを知っていると思う。	.630	-.049	.301	-.225
11	おもしろそうな作品づくりができると思う。	.544	-.17	.207	.074
3	美術の授業で、良い成績を取れると思う。	.539	.057	.016	.167
5	美術作品を作るとき、アイデアを思いつくことができる。	.453	-.075	.123	.268
<b>F2 努力志向 (<math>\alpha = .809</math>)</b>					
6	美術の作品づくりは、繰り返しやれば上手になると思う。	0.028	.973	-.146	-.102
17	努力をしたら、不得意な作品づくりも、得意になれると思う。	0.005	.758	.04	-.039
7	がんばれば、美術の成績は良くなると思う。	0.07	.635	-.057	.096
<b>F3 課題の理解 (<math>\alpha = .789</math>)</b>					
13	先生の説明を聞いたら、すぐに取り組める。	-.023	-.223	.882	.036
14	美術の教材や道具の使い方を習得できると思う。	-.085	.038	.790	-.007
16	美術の授業で教えられることを理解できる。	.188	.240	.477	-.172
12	思い通りに作品ができなくても、あきらめずに続けられる。	.209	.101	.447	.023
<b>F4 興味・関心 (<math>\alpha = .846</math>)</b>					
4	今日、美術の授業があると思うと嬉しい気持ちになる。	.136	-.028	-.175	.866
1	美術の授業を楽しめる自信がある。	.138	-.047	.005	.734
9	上手い・下手にこだわらず、楽しんで美術の授業を受けている。	-.092	.013	.317	.562
10	美術の授業では、新しい発見があったり、面白いと感ずることがある。	-.091	.274	.258	.403
因子間相関		F1	F2	F3	F4
F1		-	.51	.661	.642
F2			-	.613	.628
F3				-	.678

第3因子は「先生の説明を聞いたら、すぐに取り組める」「美術の教材や道具の使い方を習得できると思う」「美術の授業で教えられることを理解できる」「思い通りに作品ができなくても、あきらめずに続けられる」の4項目から構成されている。課題の内容を理解して取り組むことができることと関連する項目であることから、第3因子は「課題の理解」と命名された。

第4因子は「今日、美術の授業があると思うと嬉しい気持ちになる」「美術の授業を楽しめる自信がある」「上手い・下手にこだわらず、楽しんで美術の授業を受けている」「美術の授業では、新しい発見があったり、面白いと感ずることがある」の4項目から構成されている。美術を楽しみ、面白いと感ずることと関連する項目

であることから、第4因子は「興味・関心」と命名された。

また、これらの因子に対応した3つの下位尺度を設けた。

### 3. 研究2

#### 3.1. 目的

SESAの信頼性と妥当性を検討する。

#### 3.2. 内部一貫法による信頼性の検討

研究1で用いた415人のデータを用いて下位尺度それぞれCronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、創造的能力尺度で $\alpha = .829$ 、努力志向尺度で $\alpha = .828$ 、課題の



理解尺度で  $\alpha = .806$ 、興味・関心で  $\alpha = .794$ 、全体では  $\alpha = .853$  だった。いずれも十分な内的整合性を持っている ( $\alpha > .80$ ) といえる。

### 3.3. 再検査法による信頼性の検討

首都圏の公立中学校の2年生、3年生 173 人に対して、1 回目の SESA を実施し、さらに2ヵ月後に2回目の SESA を実施した。1 回目、2 回目ともに受検し、欠損値や偏った回答がなかった 145 人のデータを分析した結果、平均合計得点は1 回目 58.6 点、2 回目 58.1 だった。相関分析の結果、 $r = .791$  ( $p < .01$ ) という強い正の相関が認められた。このことから、SESA が十分な信頼性を持っているといえる。

### 3.4. 折半法による信頼性の検討

再調査法で用いた 145 人の2 回目の回答を使用して、質問項目を奇数項目 9 項目 ( $\alpha = .882$ )、偶数項目 8 項目 ( $\alpha = .822$ ) とに分割し、双方の  $\alpha$  係数から信頼度を算出した。その結果、Guttman の折半法信頼係数は  $r = .948$ 、Spearman-Brown の係数は  $r = .958$  という高い値が得られた。この結果から、SESA が十分な信頼性を持っているといえる。

### 3.5. 構成概念的妥当性の検討

SESA の下位尺度は表2に示す通りである。第1 因子である創造的能力尺度の各項目を見ると、それぞれの項目の得点が高いほど美術科の学習内容である作品を作ることにより自信があり、自己効力感が高いといえる。項目2の「おもしろそうな作品づくりができると思う。」や項目5の「美術作品を作るとき、アイデアを思いつくことができる。」を例にとると、自発的で積極的な態度であるといえるが、これは Bandura<sup>6)</sup> がいうところの認知された効力感が高ければ行動遂行に対する積極性が増すという知見と一致している。

次に第2 因子である努力志向尺度の各項目を見ると、それぞれの項目の得点が高いほど、努力をすれば美術科の成績は向上する、作品づくりが上達するという見通しが立っていることを意味する。これは学業成績を能力ではなく努力に帰属すると自己効力感が高くなるという Schunk<sup>11)</sup> の結果と一致している。

また、第3 因子である課題の理解尺度の各項目を見ると、それぞれの項目の得点が高いほど、知識的・能力的に自信があり、美術科の授業をこなすスキルが備わっていると認知していることを意味する。湯・外山<sup>20)</sup> は、興味ある対象の知識や興味あることはどうやって行けば良いのかに関する知識は、自己効力感との間に正の関係があることを示明らかにしているが、課題の理解尺度と自己効力感との関係と相通じるものがあるといえる。

第4 因子である興味・関心尺度の各項目は、自己効力感が高いほど美術科の授業に対して興味を持ち、楽しさ

を感じていることを意味している。これは自己効力感が高くなるほど、物事を「好きだからやる」「面白いからやってみよう」という内発的な興味を持つようになるという Bandura & Schunk<sup>8)</sup>、Graham & Weiner<sup>21)</sup> の結果と一致する。

以上のように、SESA の各下位尺度が測定しようとしている内容については、これまでの自己効力感の研究結果と一致する傾向を示しており、SESA は総合的に自己効力感を測定していることにほかならないといえる。

### 3.6. 併存的妥当性の検討

首都圏の公立中学校3 年生 139 人に対して、SESA と坂野ら<sup>22)</sup> が作成した一般性セルフ・エフィカシー尺度を実施した。結果から両者の間には、 $.282$  ( $p < .01$ ) という有意な相関が認められた。一般性セルフ・エフィカシー尺度が測定しているのは一般的な自己効力感で、いわば個人の性格特性のようなものであるから、この結果は性格特性としての一般的自己効力感が高ければ、美術科の学習活動に関しても自己効力感が高く、自信を持って取り組んでいるといえ、SESA の妥当性が確認されたと考えられる。

### 3.7. 美術科高校生と普通科高校生による検討

普通科高校の生徒 49 人と、美術科高校の生徒 51 人を対象に SESA を実施した。この美術科高校の生徒は卒業後ほとんどが美術大学に進学する。

SESA の結果は、普通科高校の平均値は 55.67、SD は 14.21、美術科高校の平均は 62.88、SD は 8.70 だった。t 検定を行ったところ、両者の間に有意な差が見られた ( $p < .01$ ,  $df = 78$ )。t 検定の結果、努力志向尺度 ( $t = 1.86$ ,  $df = 57$ ,  $p < .05$ )、課題の理解尺度 ( $t = 3.37$ ,  $df = 83$ ,  $p < .01$ ) において有意な差が認められた。美術科高校の生徒は美術の学習内容に関して普通科高校の生徒よりも自信を持って取り組んでいると思われるから、以上の結果は SESA の妥当性が確認されたと考えられる。

### 3.8. 学業達成との関係による検討

首都圏の公立中学校の3 年生 48 人に SESA を実施し、前学年の美術の成績のうち、作品の成績との相関を求めた。作品の成績は、1 年間に行った絵画、デザイン、映像メディア、陶芸、彫塑の5 つの題材を総合したものである。その結果、 $r = .363$  ( $p < .01$ ) という有意な相関が得られた。自己効力感が高いほど美術の成績もよいということを示しており、SESA の妥当性を示すものと考えられる。

#### 4. 考察

本研究の目的は、美術に対する自己効力感尺度 (SESA) を作成し、信頼性と妥当性を検討することである。

まず研究1では、尺度構成がなされたが、作成された尺度は「創造的能力」「努力志向」「理解力」「興味・関心」の4つの下位尺度から構成された。

次に研究2において信頼性、妥当性が検討され、その結果、十分な信頼性、妥当性が示された。すなわち、信頼性に関しては、Cronbachの $\alpha$ 係数も高く十分な内的整合性を持っていることが確認され、再検査法による信頼性係数、Guttmanの折半法信頼性係数、Spearman-Brownの信頼性係数のいずれもが高い値を示した。また、2ヵ月の間を置いた再テスト法による反応の一貫性も高かった。これらの結果は、SESAが高い信頼性を持っていることを示している。

また、妥当性に関しては、SESAは構成概念的妥当性を有していると判断され、一般性セルフ・エフィカシー尺度との間に高い相関関係が認められた。また、美術に対する自己効力感が高いと考えられる美術科高校の生徒と普通科高校の生徒との比較においても、美術科高校の生徒は普通科高校の生徒に比べて、美術に対する自己効力感有意に高いという結果が得られた。さらに、美術に対する自己効力感が高い生徒は美術の成績もよいという結果も認められた。これらの結果は、SESAの妥当性の高さを裏づけるものである。

ところで、今回、SESAの妥当性を検証していく中で、これまで報告されてきた学業達成に及ぼす自己効力感の影響についての研究成果と似たようなことが美術科においても見られることがわかった。まず、構成概念的妥当性の検討から、美術に対する自己効力感単に作品をうまく作ることができるだろうという自信(創造的能力因子)だけにとどまらなかった。能力ではなく努力によって美術の成果を上げることができること(努力志向因子)、課題を遂行できる基礎的なスキルが必要であること(課題の理解因子)、美術を楽しみ、おもしろいと思えること(興味・関心因子)の4つが相まって自己効力感を高めることになるということがわかった。これは、従来の自己効力感と学業達成に関するさまざまな研究結果と一致する。

たとえば、努力志向因子については自己効力感が高いほど、能力ではなく努力に帰属するというSchunk<sup>9)</sup>の報告、興味・関心因子については、自己効力感が高く認知するほど、内発的な興味を持つようになるというBandura & Schunk<sup>9)</sup>の報告や、自己効力感が高いほど、課題に対する興味や価値を高めてやる気を高めようとする方略である内発的調整方略をよく用い、その結果、粘り強く学習に取り組むという遠藤・中谷<sup>23)</sup>や伊藤・神藤<sup>24)</sup>の知見と一致する。

次に、SESAの得点と作品の評価との間には相関が見られたという今回の結果は、他の教科における従来の研究と同様の結果<sup>14) 15)</sup>を示すものといえる。また、併存的妥当性の検討から、一般性自己効力感が高いほど、SESAの得点も高いということが示された。この2つのことから次のようなことがうかがわれる。バンデューラ<sup>25)</sup>は、自己効力感はいわば自分の能力に対する判断であり、自己効力感が高いと満足のできる結果を残すために、自分の能力をうまく働かせて困難に立ち向かう傾向が強くなることを指摘している。つまり自己効力感が高いと達成動機が高くなることが考えられる。山田ら<sup>26)</sup>の研究では、達成動機と自己効力感がともに高いときに効果的な学習方法を選択することが示されている。これが、自己効力感が高いほど、高い評価を得る作品を作ることができるにつながったのだろうと考えられる。

本研究では、生徒の美術科に対する自己効力感を測定するための尺度を作成したが、今後は本尺度が、生徒の苦手意識を改善するために必要な方略の検討につなげていくことが課題となる。

#### 参考文献

- [1] 国立教育政策研究所教育過程研究センター, 平成21年度特定の課題に関する調査(小学校・中学校)ペーパーテスト・実技調査集計結果及び質問紙調査集計結果—図画工作・美術—, (2010)
- [2] Viktor Lowenfeld: Creative and Mental Growth 3rd Edition (1957), 翻訳版 V. ローウェンフェルド: 美術による人間形成 第三版, 聡明書房, (1963)
- [3] 降旗孝: 図画工作・美術への「苦手意識」の実態と解消のための要素—目指すべき造形美術教育の教育コンテンツ開発に向けて—, 大学美術教育学会「美術教育学研究」, 48, 369-376, (2016)
- [4] 東山明, 東山直美: 子どもの絵は何を語るか, NHK出版, (1998)
- [5] 前田基成・西口雄基: 中学生の美術に対する嫌悪感と高校での美術の選択に関する統計学的研究, 女子美術大学美術教育学研究, 1, 21-27, (2012)
- [6] Bandura, A.: Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review, 84, 191-215, (1977)
- [7] 坂野雄二人間行動とセルフ・エフィカシー, 坂野雄二・前田基成(編著), セルフ・エフィカシーの臨床心理学, 北大路書房, 2-11, (2002)
- [8] Bandura, A. & Schunk, D. H.: Cultivating competence, self-efficacy, and intrinsic interest through proximal self-motivation, Journal of Personality and Social Psychology, 41, 586-598, (1981)
- [9] Schunk, D. H.: Modeling and attributional effects on children's achievement: A self-Efficacy analysis, Journal of Educational Psychology, 73, 93-105, (1981)

- [10] Schunk, D.H.: Participation in goal setting: Effects on self-efficacy and skills of learning-disabled children, *Journal of Special Education*, 19, 307-317, (1985)
- [11] Schunk, D. H.: Influence of peer-model attributes on children's beliefs and learning, *Journal of Educational Psychology*, 81, 431-434, (1989)
- [12] 木村聡：研究レポート5 自己効力感が高い小・中学生はどのような子どもかー子どもの特徴と保護者との関係に着目してー, 小中学生の学びに関する調査報告書, ベネッセ教育総合研究所, (2015)
- [13] 柴山直, 小嶋妙子：新潟大学教育人間科学部紀要, 9(1), 37-52, (2006)
- [14] 玄正煥：努力帰属の評価が児童のエフィカシー予期の認知と学業達成に及ぼす効果, *教育心理学研究*, 41, 221-229, (1993)
- [15] 塩見邦雄・駒井良樹：理科学習におよぼす自己効力感と理科不安について, *学校教育学研究*, 7, 95-107, (1995)
- [16] 伊藤崇達：学業達成場面における自己効力感, 原因帰属, 学習方略の関係, *教育心理学研究*, 44, 340-349, (1996)
- [17] 森陽子：大学生の自己効力感と英語学習方略の関係, *日本教育工学会論文誌* 28, 45-48, (2004)
- [18] Pintrich, P.R. and De Groot, E.V.: Motivational and Self-Regulated Learning Components of Classroom Academic Performance. *Journal of Educational Psychology*, 82, 33-40, (1990)
- [19] 伊藤豊彦：原因帰属様式と身体的有能さの認知がスポーツ行動に及ぼす影響ースポーツ行動に関する原因帰属モデルの検討ー, *体育学研究*, 31, 263-271, (1987)
- [20] 湯立, 外山美樹：大学生における専攻している分野への興味の変化様態ー大学生用学習分野への興味尺度を作成してー, *教育心理学研究*, 64, 212-227, (2016)
- [21] Graham, S. & Weiner, B. 1996 Theories and principals of motivation. In Berliner, D. C. & Calfee, R. C. (Eds.) *Handbook of Educational Psychology*. New York: Simon & Schuster Macmillan, 63-84.
- [22] 坂野雄二, 東條光彦：一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み, *行動療法研究*, 12, 73-82, (1986)
- [23] 遠藤志乃, 中谷素之：中学生における動機づけ調整方略と達成目標および学習習慣との関連, *心理学研究*, 88, 162-169, (2017)
- [24] 伊藤崇達, 神藤貴昭：自己効力感、不安、自己調整学習方略、学習の持続性に関する因果モデルの検証ー認知的側面と動機づけ的側面の自己調整学習方略に着目してー, *日本教育工学会論文誌*, 27, 377-385, (2003)
- [25] バンデューラ, A., (重久剛訳)：自己効力(セルフ・エフィカシー)の探究, 佐宗省三, 原野広太郎, 柏木由紀子, 春木豊(編著), *社会的学習理論の新展開*, 金子書房, 103-141, (1985)
- [26] 山田恭子, 堀匡, 國田祥子, 中條和光, 大学生の学習方略使用と達成動機、自己効力感の関係, *広島大学心理学研究*, 9, 37-51, (2009)